

高濱虛子

屈子仙話

虚子俳話

昭和四十四年十二月二十日印刷
昭和四十四年十二月二十五日発行

定価 八〇〇円

著者 高濱虚子

発行者 柚登美枝

印刷 鎌倉印刷株式会社

製本 誠製本株式会社

発行所 株式会社 新樹社

東京都文京区目白台
一丁目二十三番五号
電話(三九四)二一〇三
振替東京五五七一九

序

終戦になつた昭和二十年頃だつたかと思ふ。まだ小諸の疎開地にをつた頃、膝を容るゝに足る茅屋に大仏次郎氏が突然訪ねて来た。この方面に来たついでに訪ねたとの事であつたが、こんな話をした。

「朝日新聞の東京版に、今度俳句を募集することにしようと思ふのだが、その選をしてくれないか。」

大仏氏は朝日新聞社の意を受けて来たもののやうであつた。

戦争の為に各新聞の体裁も激変を来たして、それまで紙面を賑はしてをつた俳句は、戦争に関するものが時々載る位のもので、紙面から殆んど跡を断つてゐた。その時に当つて、俳句の為に率先して紙面を割かうとする事は喜ばしい事と思つた。

はじめは東京版のみであつたが、間もなく大阪（大阪）小倉（西部）名古屋（名古屋）にも及んだ。

その後、昭和三十年四月から募集句に評を加へ、小俳話をも合せ載せることになつた。こ

れも新聞社の要望に依つてであつた。その俳話を集めたものが、この『虚子俳話』である。大東亜戦争が、日本国民の思想の上に大きな影響を齎した事は争はれない事実であらう。当時新聞記者のインタビューには必ず戦争の俳句に及ぼした影響を聞くのであつた。私はそれに対して斯う答へるのが常であつた。

「俳句は何の影響も受けなかつた。」

新聞記者は皆啞然として憐むやうな目つきをして私を見た。他の文芸は皆大いなる影響を受けた、と答へる中に、又、私以外の俳人は大概、大きな影響を受けた、と答へる中に、一人何の影響も受けなかつたと答へるのは、痴呆の如く見えたのであらう。

その後、俳句界の論議がだん／＼興つて来た。又、俳句の革新が叫ばれ、種々の新しい旗印が打ち建てられた。

私は依然として、俳句は伝統芸術であり、花鳥諷詠（四季の現象を花鳥の二字で代表せしめ）の詩である、といふ言葉を繰返すばかりであつた。

「深は新なり。」

「古壺新酒。」

私はこの二標語をも亦たこゝに繰返して置く。

俳話のあとに、その執筆当時に出来た私の三句を載せるのを常とした。これは俳話と何の関係もないものである。書物に纏めるに当つて、省かうと思つたが、東都書房の窪田氏の勧めによつて其儘載せる事にした。

昭和三十三年一月六日

鎌倉草庵にて

高濱 虚子

目次

序

俳句は季題の詩	三
俳句らしき格調に誇りを持って	四
平明に叙する	五
小話二つ	七
「古池や蛙飛び込む水の音」	九
「古池や蛙飛び込む水の音」(再び)	一
「いひおほせて何かある」	三
季題を最も活用する詩	五
「深は新なり」	六

写生とは発見、描写	一六
張り合ひを感じる	二〇
伝統俳句	二三
伝統俳句（再び）	二四
伝統俳句（三度び）	二六
「俳」の字（子規との問答）	二七
平明な句	二九
我はわづかに我を描く	三一
切字は俳句の骨格	三三
品 格	三四
萩と月	三六
単純化、具象化	三八
具象化（再び）	四〇
季題は俳句の基礎	四一

無季の句……………三

「子規歳時」……………五

品 格（再び）……………七

生々流転……………九

没理想……………一

実作が先行する……………三

理論遊戯……………五

句 評……………七

花鳥諷詠……………八

俳諧の生活……………九

客観的態度……………一

安らかに人生の幕を閉ぢる……………三

「非人情」「非々人情」……………五

「白帝城高急暮砧」……………七

静かに見て居よう…………… 九

尙俚の手紙…………… 一〇

俳諧性…………… 三

季題の輕視をも許さぬ…………… 四

生活の記録…………… 五

晦 澁…………… 七

慶弔贈答の句…………… 九

日本の文芸として…………… 八一

間…………… 八三

千篇一律？…………… 八五

「時 雨」…………… 八六

桜の咲いたやうな時代…………… 八八

自ら慰め唯励む…………… 九〇

偉大なるかな…………… 九二

俳諧国……………九四

「秋の田の……」……………九五

毅然たれ……………九七

泊月を慰む……………九八

特殊の文化……………一〇一

昔言つた事……………一〇三

「日に新らたなり」……………一〇四

「祭笛」の句……………一〇六

日本を見た……………一〇八

庶民の詩……………一一〇

五・七・五……………一一一

叙情過剰……………一一三

伝統の重さを背負ふ……………一一五

切字の切れ味……………一二六

平常心	一八
景色の句	二〇
単純化する強力な心	二三
碧梧桐	二四
自信を持たう	二六
存問	二七
壺中の天地	二九
割切つた	三一
「いくたびも」	三三
「遠山に」	三五
「朴散華」	三六
「鯖の旬」	三八
お祖師様	四〇
先王の道	四二

新らしい詩	一四三
外人に話した	一四四
熊木君来訪	一四七
自然は大	一四九
新らしき提唱	一五二
俳句の交遊	一五三
鈍重なれ	一五五
音楽的要素	一五九
文字を惜しむ	一六二
「鷗外忌」	一六〇
存問(再び)	一六三
子規墓参	一六四
天地有情(一)	一六六
天地有情(二)	一六九

天地有情(三).....	一七二
牧溪の栗の絵.....	一七三
交りは淡く.....	一七五
冬　　日(一).....	一七七
冬　　日(二).....	一七九
孫の汪子に.....	一八二
「歌の調べ」.....	一八三
もののあはれ.....	一八四
縁.....	一八六
平　　明.....	一八八
「虚子俳話」の遺稿.....	一九二
後　　記.....	一九二
高濱年尾	

虚子俳話

俳句は季題の詩

従来の俳句に季題といふものがつきまとうてゐるのは、何かさうしなければならん理由があるのだらうか。あると思ふ。併し仮りにこれは偶然の事だと考へてもよろしい。

仮りに偶然の事から季題は俳句より離れる事が出来なくなつたとしても、それは俳句の特性として尊重すべき事実である。

季題を俳句から排除しよう、若しくは季題を軽く見ようとする運動が一部にあるやうであるが、それも結構な事である。やがて新しい俳句型の詩が生れるかも知れない。例へば川柳と号した俳人が川柳を創めた如く。けれどもそれが価値のある立派な詩となるかどうか。それを試みようとする人には余程の忍耐と勇気を要する。

私は俳句は季題の詩として今後も育てて行く事に安心と誇りを持つ。